GR
白雲郷

とりみ

33 昭和50年1月1日

宗教法人
鳥居観音

表紙の説明

本年は乙卯年（平年）なので、これにちなんで桐江先生（83歳）が、絵馬に筆をそめられたものから取入れました。

昭和五十年白雲山鳥居観音年中行事

一月一日	新年祈禱会　午前十時
一月十七日	月例祭　観音経読誦会
	毎月執行
二月三日	節分会　午後三時
二月十五日	釈尊涅槃会
自三月二十日	うめ、さくら祭り
至五月二十日	つつじ祭り
三月二十一日	春期彼岸法要
〃	観音講祈禱会
〃	戦病戦没者法要
四月十七日	春期大祭
	地球愛護平和観音落慶式
五月八日	花まつり（月おくれ）
七月十日	四万六千日法要
七月十七日	塔婆供養
八月十六日	盂蘭盆会
	流灯供養、花火大会
	盆踊り大会
九月二十四日	秋期彼岸法要
	観音講祈禱会
自十月二十日	紅葉がり
至十一月三十日	
十一月五日	納経式
十一月十七日	秋期大祭
十二月八日	釈尊成道会
十二月十日	大黒祭
十二月三十一日	除夜特別供会　蕎会

当山に対し、年々ご参拝なされる方が多くなりましたことは何よりうれしく存じます。
どうぞご参拝の節はお気軽に庫裡へお立ちよりくださいまして、お休みくださいますようご案内申し上げます。
祈禱は年間を通じ謹修いたします。

とりゐ　第33号　1月1日発行

目　次

表　紙
高階瓏仙猊下御法話　（其の十六）……二
新年に当って……桐　江…六
年頭のことば……小林高安…八
新年互礼……
西　遊　記　（其の二八）……十一
田　舎　医　者　（其の十三）……見川鯛山…十四
諸寄進諸奉安の勧進……十七
鳥居観音だより……十八
裏表紙

道光禅師（故高階瓏仙猊下）御法話

（其の十六）

若き世代の人にすすめる

宗教は人間の持たなければならぬ〃いの一番の問題〃であると見直して欲しいものであります。

しかるに日本の現状は、物心両面のうちで科学々々といって、多く物質にぞくする方に偏重して、心の方面をおきわすれた方であります。

ことに若い世代の人に、**精神面の課題**を無視する人がだんだん多くなって、それがために暴力や、不良行為が青少年に多くなってきていると思います。

これでは次の国家の世代が、憂慮されるのであります。

私が先日、ある人を訪問しますと、親しい間柄なので、すぐ書斉に通されました。その書斉の色紙がけに、つぎのような教訓を書いた色紙が入れてありました。みじかい文であるから読んでみますと、

「人は少なくとも、一生一度は生命を投げ出すか、あるいは財産を投げ出して、かからなければならない大問題にいきあたることがある。その時に決心して臨まなければ成功は望み得ない。そのためには平素より善根の行為を積み、神仏を敬う宗教の信仰をしておらねばならぬ。それは自分の力のみでは、とうていだめである。」

とありました。若い世代の人でも、心ある人ならば、ここに気づくと思います。

すなわちこの陰徳行為と宗教心とを心がけておけと云うことであります。

要するに**人間は魂**がもとであります。その魂を養成するのは、この意味の道徳と宗教であります。そうしてそれを助けるために、いろいろの学問が必要であることを申しておきたいのであります。

座禅の力とその効果

私たちの朝から晩までの生活をよく考えますと、その根底に非常な矛盾があり、かつ、**確乎不動**な根拠に立っていない自己の存在であることに気がつくでありましょう。すなわち、人生の無常を悟り、日常の行為の、とかく罪業的であることを体験するとき、はじめて真実の世界、解脱の世界、清浄無垢な世界を求めてやまない求道心が起こってくるものです。そこに宗教心がきざし、宗教心の世界が開かれてくるのであります。

ところが、おたがいの日常生活の間において、はたして無常を自覚し、また自己の存在に不安があることや、矛盾があることに、気づいていても、深く気にとめず、矛盾を感じてもいい加減にごまかしているのが普通の一般人の日常ではないでしょうか。そこが宗教的立場から、俗世界とか、人生は虚偽だとかいわれるゆえんであります。無常や矛盾をほんとうに自覚するのは、真に目ざめた自分というものがあって、はじめてあり得るものであります。ところが日常の間に真面目の自己を見うしない、その趣味とするところは、世界一般の卑俗的な流行であり、その思想は世間一般のうわさや、世論の範囲を出ず、その生活欲望は、自分の享楽、蓄財、名利に過ぎなかったとしたら、一体どこに真面目というものがありましょうか。世間という俗悪のなかにうずまって、**自己の存在をうしなって**いるのであります。

人生の無常に気づかず、人間の老病死もよそごとに思って、自分は永遠に生きるように錯覚し、名利の追求に奔念して、人間の本魂を忘れては、安心立命はないのであります。迷執の煩悩にあやつられている世界に、真の宗教はなく、そうして日常生活の自身のなかから、自己の破綻も生じてきます。しかしその裂目から、はじめて宗教心がきざして、真実の反省が生まれ、自己の生きるべき世界を求めてくるのであります。

ここのところを道元禅師は、

「仏道を習うというは自己を習うなり、自己を習うとは自己を忘るるなり。」

とお示しになっています。この自己を忘れるとは、捉われている自我の自己を解脱することでありま す。解脱とは文字の示すように、解けて脱けることで、自由自在を得ることであります。その束縛には、肉体上のものもあれば、精神上のものもあります。世間には義理とか人情とかにしばられて、つまらぬことの羽目に苦しんで泣く人もあり、心で心をしばりくるしんでいる人もあります。神経すい弱だの、ヒステリーなどはもちろんです。世に病気という六割ぐらいは、このように、自分で自分をしばっている、はからい心が原因だという。最近の医学界の報告であります。

要するに事実か、空想か、妄想にとらわれた束縛であります。いちいちこれらの問題を分類してみれば、数かぎりもないことでありましょうが、そのなかで人生の最大とも、根源ともいうべき束縛は死生の問題であります。

その他の小問題は、すべてこの生から死にいたる中間のできごとにすぎないのです。仏法はこの根本の大問題に向かって、解決を与え、大安心を確立させるというのであります。

その大安心の立場を涅槃というのですが、涅槃とはすなわち不生滅の真理の世界で、そこに合当するところに、展開する心境であります。そこから私たちの理想境である慈悲と平和の世界も実現されるのであります。

この不生不滅の涅槃こそ宇宙の生命でありまして、やがてそれが私たちの無限につづく不滅の本生命であります。その本生命のなかに出没する、百年足らずのちっぽけな問題をとらえているのが、死生に束縛の凡夫であります。煩悩の苦患であります。ではその死生のなかのできごとをとらえて、束縛の苦しみを、私たちに与える曲者ははたしてなにものなのかといいますと、それがすなわち我見我執なのであります。この我見がつごういいように自己弁解をし、行為に反省することなく、差別的小なるこの

肉体に、常に十分な欲望の満足を得させようとするのであります。

宇宙的に見れば一瞬の存在にしかすぎないこの肉体に、永遠の持続を得させようという。無理な要求をするものなのであります。おたがいの本生命というものは、時間と空間をつらぬいて無限であるのに、我見一個の肉体の生命にすぎないそれに執着して、無限なるべき本生命にそむいているのであります。

たとえば、部屋を照らす大電灯の光に筒をかぶせて、光線の範囲をせまい部分に限るようにおたがいに人生の生命は、本生命に比べれば短小なるものでありますが、もともと本生命中の一現象でありますから、この小生命はやがて、大なる涅槃の生命に合一する連続性があるのであります。それが、我見という筒に封じられていて、小生命となっていますから、不自由で、不満足で、煩悩で、苦痛であって、さまざまな条件に束縛されているからです。束縛というと他からしばられてるかのように感じますが、実は自縄自縛といって自分で自分をしばっているのですからこの筒さえとれば、本来電灯の光は八方に光を投げたちまちあかるくなるのです。我見を打ち破れば、小生命の肉体のわれはほろびても、生命はそのまま涅槃の大生命と一致して永遠に不滅です。

無我なる永遠の生命に、単刀直入するのが座禅の力を徹底すれば、無我の世界がひらけ、一如の妙味が現われ、真実性、煩悩ならぬ清浄性が示現して、一切の人間的な個人主義の対立を、超越する心理の心境がひらけるのです。

そこには、是非、善悪、美醜、好悪、敵味方の対立がなくなって、絶対の心境となり、そこから高雅な文化の形成力も生まれてき、学問、芸術、経済、文化、等の発展も真実であります。

以下次号

新年に当って

桐江

新年おめでとうございます

本年は卯年です。昨年のたくましかった寅年にくらべますと、何てやさしい年でしょう。そして耳の大きいのでは一番でしょう。その大きい耳で、よく、遠くから身の危険を感じとって、いち早く難から逃れることができます。後足は前足より長く、よく跳躍し、素速くその場から逃げ出すことができます。

どうぞ、本年はこのうさぎのように、すばしこく活動し、人にも愛され、食生活にもまた事かかない、たのしい年をおすごしくださるよう年頭に当りまして、お祈りいたします。

さて本年は当山が開山されてから、もう三十五周年を迎えることになりました。

昭和十五年春奥の院と聖観音、梵天、帝釈天の落慶、開眼式が挙行されてからです。

大東亜戦争のはげしかった数年を除いて以来境内地の整備と共に、仁王門、玄奘三蔵塔、本堂、庫裡、鳥居文庫、七観音完成、本堂拡張、玉華門、救世大観音、納経塔、トーテンポール参道の各所に朱の灯篭、自動車道の舗装、花木苗木も増植し、年々堂塔の充実と整備が進みました。

私の小さかった夢が観音信仰を通じて、年と共に大きく拡がって来たことも事実でした。

篤信の多くの方が……「鳥居観音に一、二年来ないでいると、もう新しい物が建てられていたり、又着工されていて、年々整備されていくのにはおどろきます」と云われます。

私の夢はまだまだ拡がっていきますが、本年は不思議と云いましょうか、まわり合せと申しましょうか、地球愛護、地球儀平和観音が完成して、春にはその落慶開眼法要が執行される予定です。

この観音は、奥の院上の見晴台に建立し、高さ十五米、地球儀の直径、五・五米、観音の高さ三・五米あります。地球儀の上に立った、この観音は背に鳩の羽を模した羽を背負い両の手では、霊水が入ったつぼをかたむけて地球に霊水を注いで、地球上のあらゆるものを浄化し、慈悲以てよく人類の和合を図る。

これも私が発想し設計もいたし、昨年春着工して、今春は完成する予定です。

今世界中は、どこの国々も激変する渦の中に右往、左往してあえいでいます。

我が国もその渦中に大もみにもまれています。それが刻一刻と急変する中で、動ようと不安がつのるばかりです。

一刻でもいい、心の安らぎが欲しいのです。

四月花の盛りにこの地球儀平和観音の落慶、開眼されますことが、この時代に即応した、最も意義深いものではないだろうかと思っておる次第です。

又当山が、本年、開山三十五周年を迎えることも、一層意義深く、心からよろこぶものでございます。

尚当山のためには、役員各位、篤信の方々の心からのご協力によりまして、名実共に、宗教法人としての霊場になって参りました。

今後は役員の協議決定によりまして、年間の行事計画も一層確立させ、四方有縁の方々のご信望にお答えするよう祈るものです。

皆様に於かれましては、いつも信仰に心をおよせになりながら日々のお仕事にご精進をなさっていらっしゃいますので、いつもどこにか心の安らぎを得ておられると存じます。

このことは人間生活に欠くことのできないことと思います。

最後に、本年も、皆様の益々ご健康と、尚一層のご活躍をお祈りいたしまして新年のごあいさつに代えさせていただきます。

合　掌

年頭のことば

小林高安

改歳に当り各位がご清栄の中に新年をお迎えになったことをお喜び申しあげ更に当年のご繁昌をお祝禱申し上げご挨拶とします。

敬白

父母恩重経の講述は未完でありますが次号に載せることにいたします。

今回は私共の生活に大切な「恩」について考え、その恩に報ずる自分の心構えはどうあるべきか、其決意を新たにして自他の向上に役立つ努力の年にいたしたいと存じます。

坐右銘

人は唯一人では生きられない。

多くの人と物にささえられ生きている。

その恩にむくゆる。唯一つの道は。

人を生かし。物を生かすことである。

以上の文を毎日読んでおりますと、自然に感謝の気持が湧き上ってきますと共に、お前はどうなのかと問責されておるような気分さえも起きてきます。

古人が「一日なさざれば一日喰わず」、の大信念で日日を大切に精進努力をせられたことが身に泌みる思いがいたします。いづれも短かい文章ではありますが、千斤の重みある金言であることはご同感と存じます。

私共は自分達を生かしてくれる宇宙の万物に対して感謝の念を持てば、自分も進んで意義ある人生を得たい希望がわきます。

そこから不平や不満を解決する途が開けてくるのであります。

今日の繁栄は遠い昔からの日本民族が信念を基礎として築いた成果でありますが長い間には転転の変化もあります。今ではその基本的信念が失われつつあります随って何事にも正確な判断と実行力が生れ

て来ません。

その現実として経済面を見ましても適確な対策を見出だせず、自主的努力もせずに国際経済の中で日本丈が例外でないから仕方が無いと石油ショックを逃げ口上にして人々の眼をそらすことに無駄骨を折り自分の立場を見失っておる事実がその事を証明しております。ではなぜそうなるか考へて見ますと。

戦後の日本復興に米国の援助が大きな力となったその反面に長期に亘る占領政策を続けて犯した大罪悪を隠すため偽(いせ)の民主々義を称(とな)え原爆恐怖心を利用して多数の兵力を送り込み広大な軍事基地を占拠し防衛協定を楯にして頑張り居坐っておる事実を見逃してはなりません、これを浩眼をもって見破ることが大切であります。

他国の軍隊が駐留する国に真の独立、平和民主が存在すると思われますか?。

あるのは見世掛けの民主看板の下で白昼諸悪が横行し自他共に苦しんでるのが実態であります。毎日雑多な反動的問題が発生し人々に恐を与え相互不信の念は拡がり家庭にまで侵入し和合を破り相克の結果は夫婦親子が離反分断しお互に身勝手な悪業を犯して、現世は元より未来世にも救はれることなく子々孫々までも不幸を背負わすことは明かでありますから祖国は勿論世の為に重大事であります。

私共斯の如き事実の前に眼をつぶって人事のように思って良いでせうか、そんなことは人として許されることではありません。

このような状態を解決するために私達一人一が自覚を高め真実の正義と邪悪を分別して行動する以外にはありません。

その正邪を確認する力を養うことであります。これが宗教の根本目的であります。人間本来の仏性は誰にも具しておりますが、その働きが発動しなければ意味がありません。高価な宝石も原石の儘では光が出ない多くの工程を経て初めて妙光が見られると同様に人としての真価も修養の結果であります。

前述の苦難な状態から脱出して幸福な社会を実現するためには忍耐と努力を必要とします。人間は常

によくなりたい幸せになりたいと考えてそれぞれの業務に努力はしておりますが方向を間違えると希望が逆になります。

お釈迦様は自分から修養の道に入り難行苦行を乗越えて自ら悟りの境地を開拓されて、仏教の元祖即ち仏となって私達に道を説いてこの途は何人も安心して歩み自らを解放出来ると証明されました。それは努力の結果が無駄にならないことを教えられたのであります。その教えは広く深いもので到底凡人には手の届かぬものの如く思われるのはいろいの理由もありますが、六ケしい理屈はさしおいて観音信仰の立場から申しますと物事を正確に判断できないのは自分の心に迷いがあるのが原因であります。その迷の根元は三毒でありますこの事は以前にも申しましたが貪欲（欲深いこと）瞋恚（腹を立てること）愚癡（愚かな考え）のことであります。さらに欲を判り易く分類すると財・色・食・名・睡・五つであります。以上が人間の悩みの根元であることを常に心にとめておくことが解決の基本条件であります。

迷うのも迷わされるのも他ではなく自分であると心得て自制することが大切であります。随って日頃から自分を識ることに注意しておれば当然自分の限度を越えないから無理をしないで安心して毎日が過せる。反対の場合は自分を能力以上に評価して禍ちを犯し易い結果は常に不安焦燥の中に不快な生活よりありません。この両面のことをこの世の地獄・極楽と申します。

どの途を選ぶかは自分であり他から押つけることはできませんが私は皆様にお勤めします観音信仰に徹して戴けば必ずや観音妙智力を豪り自分、家庭、社会否世の中全体に能救世間苦の大慈大悲の光明を及ぼすこととなります。

このことが真実の報恩の願行であり現当二世に亘る福聚海無量の功徳を生ずる最善最勝の道であること申し上げて擱筆いたします。

合　掌

謹賀新春

渋谷区	埼玉銀行 取締役会長 石坂　泰三	与野市 〃 取締役頭取 長島　恭助	目黒区 〃 取締役副頭取 松平　忠晃
文京区		浦和市	〃
埼玉銀行 専務取締役 大木　恒四郎		〃　〃 福原　弘	〃 常務取締役 堀込　聰夫
渋谷区		練馬区	深谷市
埼玉銀行 常務取締役 尼崎　謙一		〃　〃 松本　五良策	〃　〃 持田　高良
練馬区		与野市	川越市
埼玉銀行 常務取締役 持木　豊		〃　〃 永田　武彦	〃 取締役 山本　俊雄

草加市	埼玉銀行 取締役 小倉一郎	所沢市	埼玉銀行 取締役 神尾昌一	東京	〃
熊谷市	〃 〃 青木良輔	羽生市	〃 常任監査役 堀越一郎	東京	〃
浦和市	〃 〃 伊地知重威	浦和市	〃 監査役 大沢雄一	東京	〃
東久留米	〃 〃 柳田正夫		〃 〃 井原隆一	東京	〃
行田市	〃 〃 加藤義雄		〃 〃 井田英一	東京	〃

東京	大栄不動産㈱ 会長 大川鐵雄	〃 社長 桐木光三	〃 専務 今津政雄	〃 〃 斉藤善政	〃 常務 木村信
東京	大栄不動産㈱ 常務 杉山義喜	〃 取締役 室田由雄	〃 〃 森川茂男	〃 部長 福田善昭	〃 〃 山本博男

〃	〃	〃	〃
〃 〃 原藤春雄	〃 〃 島田森雄	〃 〃	〃 室長 會川達雄
〃	〃	〃	〃 部長 河野智彦

東京	大栄不動産㈱ 部長 大矢守蔵	〃 赤羽暁	〃 支店長 坂詰八郎	〃 長谷川正男	〃 高瀬亀吉	〃 渡辺清	〃 丸山一雄
東京	武州商事㈱ 社長 矢島武久	〃 山崎文男	〃 本島茂	〃 柳沢金公	〃 内村葆	〃 杉浦政雄	中央区 谷善之丞
東京	不二サッシ工業㈱ 社長 佐野友二	〃 下村彌一	〃 工藤侃	〃 中島操	〃 荒川安正	〃 井上千寿	〃 櫛野明
東京	不二サッシ工業㈱ 進藤義雄	〃 飯塚由利	〃 中川敏雄	〃 オリエンタル写真工業(株) 社長 黒川倉好	〃 菊地虎雄	〃 新井二郎	〃 中山誠一

東京	オリエンタル写真工業㈱ 青山正道	〃 田島大三	〃 江藤三喜男	〃 堀清	〃 大畠周作	〃 坂上尚男	船橋ヘルスセンター 社長 山根春衛
東京	船橋ヘルスセンター 大庭英男	〃 大木清二	〃 松本四郎	〃 高山重郎	〃 吉永武男	〃 右近保太郎	〃 佐々木文三郎
東京	日本火災海上保険㈱ 西山秋二	〃 水口憲夫	〃 斉藤達	〃 ㈱三信工業 服部雄太郎	〃 専務 服部雄次	浦和市 藤沢帝	〃 専務 藤沢秀夫
浦和市	武州印刷㈱ 常務 藤沢やす子	〃 宮崎昇	清水市 松田江畔	世田谷 石毛銀一	港区 黒川武雄	世田谷 平沼浄	名栗村 岡部千三

名栗村	小林高安	岩槻市	埼玉トヨペット㈱	石田照男	東京	日本工電工業㈱
〃	町田真之亮	板橋区	千田儀一郎	〃	岸上丘	〃
〃	有馬忠直	川口市	増田金蔵	〃	広瀬電機工業株式会社	仏教タイムス
〃	鯨井孝彦	板橋区	榎本みや子	保谷市	京極栄子	千代田
飯能市	梶谷真一	埼玉トヨペット㈱	東京	日本工電工業㈱	萩野義夫	渋谷区
東松山	千原元	〃	〃	井原隆一	〃	文京区
大宮市	天海秀夫	〃	〃	久満光樹	〃	世田谷
渋谷区	奈良政子	女性仏教	川里村	瀧沢秀夫	浦和市	松本弘道
千代田	広瀬元美	〃	東京	渡辺綱雄	国際興業㈱ 社長	小佐野栄
〃	小佐野定彦	専務	〃	山崎完	〃	〃

東京	国際興業㈱ 常務 高岡良男	練馬区	全日本仏教婦人連盟 理事 山口貴美子	大阪市	辰野克彦	中央区	東海鋼業㈱ 専務 二亦正
〃	〃 自動車部次長 小西合三	豊島区	〃 来馬秋子	〃	辰野幸正	〃	〃 取締役 夏秋尚平
〃	〃 計画課長 田口力	新宿区	〃 中田和子	〃	辰野元彦	〃	〃 斉藤正三郎
〃	〃 乗合課長 志鎌登	千代田	〃 高橋つね	〃	辰野守彦	〃	〃 古賀浩
〃	〃 総務課長 村田計雄	新宿区	〃 上田花子	杉並区	安田生命相互保険会社 相談役 竹村吉右衛門	鎌倉市	小糸源六郎
東久留米	全日本仏教婦人連盟 理事 山本スギ	世田谷	〃 高田与志子	中央区	東海鋼業㈱ 会長 喜代永政雄	名栗	平沼幸一
世田谷	〃 船口暉子	大阪市	辰野彦一	〃	〃 社長 堀宗一	飯能	武居藤吉

東京	(株)三信工業 常務	山本 一雄
〃	〃 務常	古目谷 弘
〃	〃	白山 暁
〃	〃	和田 清治
〃	〃	宮本 享
〃	富士倉庫運輸(株) 社長	前田 安彦
〃	〃 副社長	高木 菊三
〃	〃 常務	川島 源次郎
〃	〃 〃	清水 喜久雄
〃	〃 〃	滝沢 弘
〃	〃 取締役	綱野 久一
東京	富士倉庫運輸(株) 取締役	石川 泰治
〃	〃 〃	原 隆
〃	〃 監査役	廣住 温
浦和市	武州印刷(株) 部長	横堀 昇
〃	〃 工場長	大久保 忠示
〃	〃 第二工場長	北原 庄三
〃	〃 営業部長	当間 庸隆
〃	〃 〃	馬橋 久雄
〃	〃 副工場長	小島 順太郎
川越市		山崎 嘉七
浦和市		田島 一夫
上尾市	埼玉トヨペット(株)	兵頭 睦雄
岩槻市	〃	古田 勝蔵
上尾市	〃	柴崎 昌夫
飯能市	〃	加藤 育三
新宿区	〃	山澤 隆一
日高町	〃	嶋田 保
鴻巣市	〃	久保田 忠治
大宮市	〃	小島 武夫
熊谷市	〃	長谷川 栄二
浦和市	〃	宮野 孝
〃	〃	花木 孝
飯能市	埼玉トヨペット(株)	真柄 勇
浦和市	〃	岡部 政雄
〃	〃	比留間 豊夫
吹上町	〃	根岸 栄一
上尾市	〃	堀田 博光
北本市	〃	佐藤 政之
毛呂山町	〃	岩崎 恒雄
浦和市	〃	宍戸 忠治
〃	〃	小沢 恒介
岩槻市	〃	中田 靭男
上尾市	〃	大滝 孝

大宮市	埼玉トヨペット(株)	小池康夫
熊谷市	〃	山口　素
大宮市	〃	落合隆二
吉見町	〃	新井和明
三芳町	〃	岡部亮介
川口市	〃	小図子利行
北本市	〃	見富　貢
与野市	〃	松本　功
熊谷市	〃	佐藤寿夫
〃	〃	船田　栄
浦和市	〃	黒沢洋一
北本市	埼玉トヨペット(株)	岡田　功
飯能市	〃	内田政治
大宮市	〃	黒田　明
白岡町	〃	大久保良一
川口市	〃	小林文久
大宮市	〃	望月盛隆
〃	〃	黒須達児
川越市	〃	金野　裕
羽生市	〃	岡田孝徳
大宮市	〃	常見武男
〃	〃	川野博通
上尾市	埼玉トヨペット(株)	大川長信
飯能市	〃	平松正吉
大宮市	〃	平沼一幸
〃	〃	佐藤昇治
浦和市	〃	高野貞夫
栗橋町	〃	白井一郎
与野市	〃	天野富雄
大宮市	大宮クリーン社　社長	古室　進
伊奈町	埼玉トヨペット陸送(株)	蟹沢秀治
大宮市	マサキオートサインボード	正木三昭
朝霞市		広瀬秀雄
行田市		馬橋正之助
東京		松本　元
〃		島田喜久子
〃		渡辺商店
〃		浜崎国男
〃		今井豊子
〃		若林とく
〃		鈴木きせ

お申込順に掲載させて戴きました

西遊記（其の二八）

岡部千三

雨ごいくらべ

あくる日になって、虎力と鹿力と羊力の三人は、まほうの力で、夕べの星のお祭りの段の正体をよくしらべ、悟空たちがやったことを知った。

三人は、かんかんにおこって、国王に、三蔵法師と、弟子たちのことを云いつけた。

「坊主どもをにがし、祭りの段をあらしたとほうもない乱ぼう者どもです。どうぞ重いばつをいいつけてください。」としきりに、国王をけしかけた。

「法師を呼べ、弟子どももつれて参れ」

国王は、三蔵法師と悟空たちを呼んで、らんぼうしたわけを聞いた。

法師は、何も知らないので、だまっていると、悟空が……おそれるところもなく、

「らんぼう者が、わたしたちなら、なぜすぐにとらえなかったのでしょう。今になってそんなことを云いだすほうこそ、あやしいものだと思いませんか」

虎力、鹿力、羊力の三人のほうを見て、にやにやわらっていた。

そこへ、おおぜいの百姓がおしかけてきた。

「雨をふらせてください。田がひあがりそうです。作物が枯れてしまいます。わたしたちはどうなるのでしょう」と口口に云った。

国王は、それをきくと、

「おお、よいことに気がついたぞ」

法師と、三人の仙人に向って云った。

「国じゅうの者が、ひでりでこまっている。おまえたち、ひとつ、雨ごいくらべをしてみてはどうだ、うまく雨をふらせた者は、正しい者、しっぱいしたほうがわる者と、こういうことにしようではないか」

「それはけっこう、たがいに力をためしましょ

う」と、よろこんで進んでたのは、虎力仙人だった。

国王は、さっそく、雨ごいの祈りをする、高い段をつくらせた。

まず虎力仙人が、段へあがろうとするのを見て、悟空は、にっこりしていた。

「虎力先生、ほんとうに雨をふらせることができますかな。しっぱいすると、みっともないですよ。わらわれるのがいやだったら、いまのうちに、やめたほうがいいでしょう」

「だまれ。さるなんかの知ったことではない」

じろりと、にらんで、

「見ておれ。わしが一度祈れば風がでる。二度祈れば雲だ、三度めの祈りで雷がなる。雨になるのは四度めの祈りだ、おどろくな、五度めの祈りで、雲も雨もぴたりとやむのだ」

「へへっ、そううまくいけばえらいものだ、では、ゆっくりと、見せてもらいましょう」

できるものかと、悟空は、たかをくくっていたが、いよいよ虎力仙人の祈りがはじまると、どこからともなく、ざわざわと、あやしい風がふいてきた。空はたちまちくらくなり、雨雲が、黒ぐろとひろがってきた。

「これはいけない。ふりだしたぞ」と悟空はあわてた。

虎力仙人の術で雨がふっては、悟空たちのまけになるので、どうにかして、じゃまをしなければならない。

悟空は、いつものように、一本の毛で身がわりの悟空をつくっておき、自分は、さっと空へまいあがっていった。

空で、風の神と雷神と雨の神にであった。

「こらっ、風の神。わしは斉天大聖だ。おまえたち、虎力仙人に呼ばれたからと云ってのこのこ出てきてはいかん。わしの云うことをきけ。いいか、雲を遠く吹きとばすのだ、雨などふらすとしょうちしないぞ」

「はい、斉天大聖さま、そのとおりにいたしま

す。けれども、わたしは雨をたくさんに用意しましたのでこれを持ち帰るわけにもいきません。そこでいつふらしたらよいかおしえてください。

「よしわたしがよんだ時に、ふらせろ。まちがえるなよ」

「だいじょうぶです。では、またあとで、おめにかかることにしましょう」

風の神は、風の袋を抱えて、そのままいってしまった。雷神も雨の神も、そのあとについていった。

虎力仙人は、いくら祈っても、何のきざしもあらわれないので、はてなと、首をひねってしばらく考えた。

「これはまことにおかしい。きょうに限って、祈りのかいがないなんて、ふしぎだ」

あせみどろになって、気も狂わんばかりにいっしょうけんめい祈ったが、やっぱりだめであった。

悟空は、空からおりてきて、身がわりの悟空とかわると、

「いかがですか、虎力先生、わたしの目では、すこしも雨が見えません。先生の祈りというのはこんなことなのですか」

いじのわるいことをいって、ひやかした。

「うーむ、きょうは、雨の神がるすのようだでな」

どうしようもない虎力仙人は、まけおしみをいいだした。

「ははァ、るすとは、うまいいいのがれですね。では、わたしたちのおししょうさまに、祈っていただきましょうか、おししょうさま、どうぞおねがいします」

「悟空、ちょっと」

法師は、悟空の耳に、小さな声で云った。

「わたしには、雨ごいの祈りなんてできないよ。お前は、こんなことをひきうけてしまってどうするのかね」

「ごしんぱいはいりません。だんへ上ってくだされば、わたしが、うまくやります」

以下次号

田舎医者（其の十三）

見川鯛山

挿絵　おおば比呂司

貴公子（続）

恥じらってうつむいた彼女たちの顔の前を、ジョウジの光ったエナメルの靴がコッツ、コッツ、と音を立てて石畳を歩いていった。あとから重いトランクを持ってタクシーの運転手が続いた。すると男たちの目が、鋭くトランクを追った。

夜は盛大にジョウジの宴をはった。村の名士たちはモーニングのきゅうくつな袖を引っぱりながら、一人ずつ前に進み、ジョウジに酒をついだ。若き貴公子はにこやかにその盃を受けると、いくらでも呑んだ。

着飾った三人姉妹が、花びらのように宴を歩くと、もう酔った坊様の衣が黒い蝶になってその後を追った。

夜を徹して宴がつづいた。

私が初めてジョウジ臼井を見たのは、小学校での彼の講演だった。

〃ブラジル移民のその後〃

気の毒なこの青年紳士は、苦しげな日本語を使ってしゃべっていた。演説は大好評であった。

二度目に彼に逢ったのは往診の途中だった。ジョウジは一番上の娘と腕を組んで、夕焼けの丘を歩いていた。私は帽子をとって、すっかり似合いの若夫婦にあいさつを送った。

三度目は、診療所の前を粋な革ジャンパーを着たジョウジで、臼井家の新品オートバイにのってとばしていった。

二番目の娘がうしろから彼の腹に抱きついていた。発らつとしたこの一組にも、私は祝福の手を振ってやった。

だが、村の若い衆達はつばを吐いて去っていった。

「あん畜生め！　片っぱしから手えつけやがるだ」

ジョウジがきてから一週間たった。公民館の青写真もできた。工事の入札も終えた。寺では葬式の日取りもきまった。奨学資金の制度も条文も完成した。

そろそろ、ジョウジが気をもみはじめた。集まる視線の前で、彼はとうとうトランクを開けて見せた。トランクの中には衣類ばかりがはいっていた。

「ドルは、全部、東京の銀行アズケマシタ。銀行オソイです。ドルから円にすること、タイヘンむずかしいデスネ私コマリマス、私オカネ、いまアリマセンネ……」

彼が肩をしぼめていった。よほど悲しいのだ。見かねて臼井老人がいった。

「日本はだめな国ですだ、役所の仕事みんなおそいですだ。申しわけねえですだ。でも急ぐことねえです。これその間に使ってなせ、どうぞな……」

と彼は日本政府の不てぎわをわびながら、銭をいくらでも立て替えてやった。

「オオ、サンクス。いつも、いつも、タイヘンスミマセンネ」

ジョウジはテレくさそうに札たばをうけとると、またたく間に町でカメラや金時計を買った。

クリスマスがきた、高原は雪になった。雪を顔にあててブラジルの客人は少年のようによろこんでみせた。

娘たちはジョウジの部屋にクリスマスの樹を飾り、大きな菓子にはローソクを立てた。うす暗く、布をかぶせた電灯の光で、彼女たちは代わる代わるジョウジに抱かれ、頬を合わせて踊った。夜ふけまで、彼らは外国の歌をうたい、外国の酒をのんだ。

その夜、姉娘が一人、ジョウジの部屋でねた。

明け方が近かった。突然庭先でオートバイが鳴り出し音と煙を残しながら門をくぐりぬけていった。南米の貴公子は、彼の乱れた夜具の中で満足そうに疲れてねむる裸の美女のほかには、ハンカチ一枚も残さず、それっきり姿を消してしまった。

大先生

北条の部落へ入ると、どこもかしこも柿だらけで、真赤な実が枝もたわわに熟れていた。

その道で私は奇妙な男に逢った。彼は羽織袴で白足袋をはき、肩までたらした長いかみがふけだらけで犬臭かった。男はたぶん、売れゆきの悪い浪花節かたりかもしれない。

私と並んで歩きながら、浪花節の先生が紋つきのふところから、真赤な柿を二つ出した。

きっと私に一つくれる気なのだ。しばらくの間、先生は両手の柿を見くらべていたが、大きい美味しそうな方だけ残して、別の方は再びふところへしまってしまった。

——ふん、どうせどっかで盗んだ奴にちがいないんだ。私は欲しくなんかないさ——

やがて、唇のあつい浪花節の大きな口が、がぶっと、柿をかじった。

「プッ　ププッ、ブブ……」

と、彼が頬をふくらませ、顔をしかめて道に赤い唾を吐いた。

「なあんだこの柿、まるっきり食えたものぢゃねえや、なあんて渋い畜生だ、見た目にァ美味げだがな。まァ、なんだな、人生万事すべからくこんなもんだな。そう思わねえか、キミイ?」

やぶから棒に、彼がむずかしいことをきいた。その声が太く、そして渋い。やっぱり浪花節の先生にちがいないのだ。

以下次号

諸寄進、諸奉安の勧進

壱万体観音奉安勧進　現　八、四三〇体

壱体　A金壱万円、B金七千円
永代供養勤修します
壱万体観音一体に仏壇奉安の小観音一体をさし上げます。

壱万巻写経奉納の勧進　現　七、二八〇巻

壱巻金壱千円　お一人で何巻でも結構です
写経の本は般若心経の折本で、文字の上を書写できるようにできています。

参道大灯ろう寄進の勧進

壱基　金拾参万円
参道に赤の大灯ろうが、すでに寄進されて、美観を呈しています。現在四十壱基のご寄進をうけております。

地球愛護地球儀　平和観音建設費の勧進

現在までに参百八拾万円の御奉納がありました。来春四月落慶の予定で工事も、着々進行しております。

境内に花木其他の植物の奉安勧進

境内には数万の花木が四季をかざっていますが、まだ植栽も可能ですのでご協力下さいませ。

壱万体観音奉納者芳名　第十八集

八月より十月
敬称省略

住所	芳名	住所	芳名
太田区	神原きよ	名栗	中村明文
品川区	三宮菊枝	日光市	小林カツ
小平市	辺見嘉次（外一体）	川越市	小林徳直
入間市	原進	鎌倉市	的場まつ
狭山市	山岸武	練馬区	山野タツ子
入間市	高橋邦子		
北区	山崎安子（外一体）	合計	八、四三〇体

鳥居観音だより

盛大に終った秋の行事

当山の四大行事中、紅葉にかざられた中での諸行事は、広く講中、篤信者、各位のご支援によって、盛大に執行できました。又この期間中一般来山の方も、季節だけに増加いたし紅葉の期間中にぎわいました。

白雲山内の紅葉の美と、大観音、玄奘三蔵塔、納径塔、平和観音等の色採がそれぞれ優雅に調和しての美観は登山なされた方々の目に等しく印象づけられました。

一ヶ月余にわたっての紅葉の美は、まさに天下一品となりました。

激変する現代社会の中に都心から二時間余りで、清流と緑と調和した此処は、やはり、観音霊場として、今後への期待は益益大きく発展し、信仰を求める四方有縁無縁の方々で四季を通じてにぎやかになりました。

○来山の状況

七月二十八日、川崎市、宮田様来山、藤井様来山
写経五巻お申込受付
七月二十九日、浦和、遊馬様、東京、田辺様、平沼新八郎様、内田桂一郎様、
七月三十日名栗、平沼様、青梅市小峰様
七月三十一日、名栗、田島様、飯能市、鹿戸様、池田様
八月一日　名栗、浅見寅雄様
八月二日、都下瑞穂町、古川様、青梅市、古川様
八月三日　飯能市、植竹様、所沢市、小山様
八月四日　清瀬市堀沢様来山、名栗、平沼清儀様
八月五日　鎌倉市佐々様
越谷市佐京様、八王子加藤様
八月六日　名栗松下様、川崎様、入間市鈴木様、東京宍戸様

八月七日　保谷市小林様、名栗吉田仙太郎様、入間市原様、名栗野本様、飯能鹿戸様

八月八日　所沢市斉藤様、埼玉トヨペット様、名栗町田様、練馬区井口様、国分寿市汐川様、坂戸平井様、名栗佐藤様

八月九日　四ッ木江端様、所沢木下様、羽村町宮沢様、川越原田様、新宿石原様、名栗枝久保様

八月十日　川越斉藤様、名栗田地様

八月十一日　飯能、小川様、雨宮様、小山様

八月十二日　朝霞市、広瀬様、東京、新妻様、名栗、岡部様、神林様

八月十三日　川口市、飯塚様、名栗、本橋様

八月十四日　名栗、岡部様、杉並区三信工業様

八月十五日　飯能、平沼様、名栗、佐野様、東京右近様、狭山市、青木様

八月十六日　午後五時より流灯法要執行、灯ろう総数　一、一六〇灯に及ぶ

出席は開祖平沼先生ご夫妻、東京、榎本みや子様外六〇名、東京、江崎様六名、東京、新妻治郎様一〇名、川越斉藤新作様四〇名、斉藤定次様五名、本村その様十名、金高幹雄様四名、広瀬秀雄様四名、地元役員、浅見富蔵様、平沼幸一様、武居藤吉様、トヨペットより梶谷様外三名、東京、郡司様五名等で夜に入って流灯に参加なさった。

又恒例により瑞穂町の鈴木様外三〇名はセンターに投宿されて流灯から盆踊りまで、参加なされた。

八月十七　日流灯法要会場の整理、名栗川の清掃実施

八月二十二日　浦和ときわ子供会来山

八月二十三日　浦和子供会来山庫裡使用

八月三十日　武州印刷、寺西様外五名来山

九月七日　平沼先生御夫妻来山、吉祥寺、ショッピングビルより鈴木様、東急店、中島様来山

九月八日　日光、湯本、釜屋旅館小林様来山、虹鱒を贈らる。

九月十八日　東京、佐久間様一行来山、観光バスにて約三百名、エースにて山へ案内す。

九月二十四日　台東区、清野様来山

九月二十八日　船橋市、工藤儀一郎様二十余名来山

十月十六日　片倉チッカリン元現役員十名来山、広瀬秀雄様来山

十月十七日　杉並区、古屋様外多数来山

十月二十日　千代田区、三浦様、国分寺市、丹羽様、祈禱に来山、浦和市　堀崎様自動車の祈禱に来山

十月二十一日　片倉チッカリン野村様より

「謹啓　秋冷の候益々御清祥の段何よりのこととお喜び申し上げます。

扨て昨十六日には十一年振りに貴地を訪れ、三蔵塔を始め救世大観音に参詣、併せて目下建立中の国際平和のシンボルとしての平和観音にも詣で、実に楽しく、又感謝にみちた一日を送ることができて、生涯のよき思い出となりました。これ偏に庫裡に於ける高堂始め関係皆様のお心こもれる温いおもてなしのお蔭にて、御礼の言葉もございません。

私共十人は片倉チッカリンの役員だった者又は現在役員で名栗の鳥居観音とは縁の深い者ばかりです。一同の喜びは言語に絶するものがありました」

ありがたく拝受しました。

参道の鋪装工事完成す

当山の車道で一番急坂なヶ所、約百二十米を幅員四米のコンクリート鋪装に改修いたしました。

十二月一日から八日まで、諸車の通行を止めて、徒歩で入っていただきましたが、工事もスムースに進んで、十日から諸車の入山ができます。

車の運転も一そう楽になりました。

とりゐ　第三十三号　発行日　昭和五十年一月一日
編集兼発行人　埼玉県入間郡名栗村　鳥居観音　岡部千三
印刷所　浦和市仲町二-八-十五　武州印刷株式会社
発行所　鳥居観音電話〇四二九七〇四　名栗二七五番

白雲山 鳥居観音 観世音センター案内図

琴比羅神社
棒の峰
秋葉山
有間渓谷
納経塔
面白岩
三蔵塔
平和観音
白雲橋
見晴台
大黒殿
自動車道
蛇の目型四阿
教世大観音
休憩所
観音滝
子育地蔵
仁王門
トーテンポール
玉華門
梅月橋
梅鉢の墓
諏訪神社
稲荷神社
塔輪型四阿
炭谷川
庫裡
本堂
鳥居文庫
ますつり場
観世音センター
水泳場
鳥居観音入口
至父峠
至秩父
至高崎
飯能
荒川
大宮
名栗川
小沢峠
川越
青梅
豊岡
浦和
拝島
所沢
川口
練馬
赤羽
八王子
立川
新宿
池袋

春　の　行　事

○新年祈禱　1月1日10時より3ケ日執行します。

願意―家内安全、商売繁昌、試験合格、安産、交通安全、諸病平癒、大願成就、其他。

祈禱料―金壱千円、金弐千円、金参千円以上。

お申し込―12月末日までにおねがいします。

尚祈禱は年間を通じ、常時受付て執行します。

○節分会　2月3日午後3時執行します。ご参拝の方に福豆袋入をお分けします。

○ねはん会　2月15日　午前10時執行します。

○春彼岸法要　3月21日午後1時30分執行します。

○春季大祭と地球儀平和観音落慶開眼式　10時執行。境内の花が真盛りの頃です。ご参拝をお待ちします。

花のお知らせ

○梅まつり　3月下旬から4月上旬まで。

本堂附近の山麓によい香りを漂せます。

○つつじまつり　4月上旬から5月中旬まで。

三つ葉つつじの紫から、紅のつつじへ咲き次いで、山内は見事です。お弁当などご持参で山内をごゆっくりご探勝くださいませ。